

# R e f e r e e

2012, 12月～2013, 1/23

私は選手時代に、ある審判員の採点に疑問を感じていた。疑問を感じながらダイブしていた。本来ではあってはならないジャッジの世界で、当たり前のように採点されていく。その当たり前が本筋のジャッジなのかも知れない。いずれにしても何故ジャッジがそのようなジャッジになるのか明確な答えは今になっては不明である。人間の持っている主観というものはあるときには優しくて、あるときには牙をむく。

国際審判員の資格を取得して、私が選手時代に味わった感覚とはなるべく別のものを感じ取れるようにジャッジしている。

中国・広州で行われたアジア大会の審判員になり的確なジャッジをした。私はそのつもりである。中国の優勝候補の選手が1m男子飛び板飛び込みで305c（前逆宙返り2回半）の演技をした。入水で体が半分捻り、膝を曲げ、体を反ったオーバー入水であった。板を踏むのはいいが、力んで踏む動作が影響した入水であった。完全に失敗演技である。私は2.5を間髪いれずに出した。確か、ウクライナの審判員も2.0を出していた。他の審判員のジャッジは5ぐらいではなかったかと思う。5.5を出している審判員もいた。審判長は間合いをとって向こうの逆プールサイドから私のところに歩み寄ってきて、「これで間違いないか」と聞いてきたので「もちろん、いいです」と答えた。その確認をしてからゆっくりと審判長席まで帰り、競技を続けていった。こういう確認事も審判長の仕事なのだと思つて改めた。

国際審判員のジャッジスクールでNZのロビン・フット氏が再三言われていた、「全体の印象」を持ってジャッジしなければならない。悪いものは悪い。5点のものは5点なのである。それを合理的な見方で「ここは悪かったけど、あそこは良かった。」と思うのか「あそこは良かったけど、ここは悪かった。」と思うのか。どちらにウエイトを置くかという問題が残る。それを全体の印象でジャッジしなければならない。審判員はもう少し自分自身を律するべきだと思う。そして、誰に何と言われようと自分の採点基準によりジャッジをする。採点基準をどうだこうだというのは以前の問題である。それまでにしっかり勉強をして審判席に座っているのである。

私は、審判席に座らない審判長を目指すことを目標にしたい。前の例にあったようなことも審判長が試合を進行しているのだ。そういう意識で審判をしていきたい。以前、国体で審判長の大坪敏郎先生が試合中に選手の演技失敗後に飛び込まれたということがある。服もずぶぬれである、先生は何食わぬ顔をして審判業務を続けていたという姿を観客席で観ていた私は、「かっこいいなあ」と思ったものである。確か北海道国体の少年男子高飛び込み決勝での出来事であったと記憶している。私はこんな審判長になりたいと思っている。